

十九世紀中国の戦闘時事版画

——太平天国から義和団事件まで——

三山 陵*

【博士学位論文要約】

アヘン戦争（一八四〇年）以降、十九世紀の中国（清朝）では、日本や欧米列強との戦闘が続いた。その間に太平天国など国内の反乱があり、清朝は徐々に滅亡へと追い込まれていった。この内憂外患の時期、これらの戦闘・戦争を描いた「戦闘時事版画」が、庶民を対象に制作・販売されていた。

実在が判明している戦闘時事版画は、太平天国時期のものから中華民国成立後の一九二〇年代の軍閥戦争までであるが、本論では時期を十九世紀後半の太平天国から義和団事件（一九〇〇年）までに限った。この時期の中国は、メディア（印刷、報道）の大変革期でもあり、戦闘時事版画にもその影響が見られる。

戦闘時事版画は、内容から「ニュース画報」と思われがちであるが、それは近代社会から見た理解であり、戦闘時事版画に「報道」の役割はなかった。これを掲載した外国誌は、口を揃えて「中国の時事版画は事実を反する」と厳しく批判した。しかしこれは近代ジャーナリズムが確立している西欧側からの批判である。戦闘時事版画は、本質的には「観て楽しむもの」であり、表現内容に事実との乖離があることは受容層にとって問題にならない。また、深層には「中華帝国は世界に君臨する」という得勝図の伝統意識（中華思想）が流れている。

制作面では、民間版画制作と同様に粉本化とパターン化の現象がみられる。売れ筋の図が「粉本」（絵手本）にされ、同一の図像が回復使用される。さらに転用（借用・盗用）を繰り返した図が、描画の型（パターン）として定着する。型は絵文字の機能をもち、庶民はその型の図を見れば内容が推測できるのである。

庶民向けに制作された戦闘時事版画は、俗語や芝居などの大衆芸能との関係も見られる。新聞報道が普及した清仏戦争以降は新聞記事との関連も見いだせるが、本質的には民間版画の「年画」と同様に、娯楽・観賞の対象であった。

清末庶民の素朴な感情（吉祥祈願）と、長い間に培われた思考法（中華思想）を直截に反映する戦闘時事版画は、当時の社会、文化を知ることが出来る貴重な資料である。

キーワード：戦闘時事版画、報道、年画、得勝図、中華思想、粉本

*みみやま・りょう、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程（二〇〇七年三月修了、学位取得、中国美術）

はじめに

中国の庶民の美術——民間美術には、民間版画と呼ばれるジャンルがあり、これは庶民が生活の中で消費する版画(主に木版画)の総称である。その中に、日本の「かわら版」と同様に時事を描いた図がある。筆者の博士論文は、時事版画のうちの戦争に關した版画や戦場場面を描いたもの(以下、戦闘時事版画という。「中国」は省略する)に焦点を当てて考察を進めた。

戦闘時事版画は中国国内で保存されている作品は少なく、多くは国外に收藏されている。筆者は日英仏露の博物館・図書館を調査し、約百五十点の戦闘時事版画を見つけた。かつてこれだけの戦闘時事版画が集められたことはなく、戦闘時事版画を主体とした研究もない。

本博士論文では、戦闘時事版画が形成された背景や社会の変化に眼を配りながら、版画の受容者である庶民の文化や彼らの伝統的価値観との関係を探り、戦闘時事版画の本来の役割——本質を明らかにしようと試みた。また戦闘時事版画を版画制作の観点からも分析した。版が再利用され、あるいは模倣・流用される実例を挙げ、この過程を経て戦闘時事版画の型(パターン)が形成される(粉本化)することを究明した。

先行研究がないとあってよい戦闘時事版画の研究は、細かい検証を積み重ねることのできる実体が見えてきた。しかし博士論文全体を要約すると、この検証の多くを省略せざるを得ない。そこで本稿では、まず博士論文の概要を章ごとに短く記し、加えて検証の一部として、第三章の「第三節 新聞、画報と戦闘時事版画」

の「二」、「點石齋畫報」より前に発売された石版印刷画集」(抜粋)を発表することで、博士論文公開の義務を果たしたい。なお、図版番号はそのままとし、一部の参考資料は割愛した。

【博士論文概要】

◇第一章 序論

第一節は研究のねらいを述べる。一般になじみの薄い中国民間版画およびその一部である年画について説明し、戦闘時事版画の用語について定義した。第二節では、戦闘時事版画に関する先行研究を紹介し、それらの多くが「反帝」の視点しか持たないという問題点を提起した。

◇第二章 戦闘時事版画の概要

第一節では、調査・収集した戦闘時事版画の図像資料を歴史事件別に分類整理し、版画に書き込まれた文字を書き起こした。これは一種の戦闘時事版画データベースである。版画が描く戦闘の状況を説明するほか、版の寸法、版画の生産地、版画制作の技法(木版、多色刷、石版など)、收藏先收藏番号などを付した。また各收藏先のコレクションの来歴を記した。歴史事件は次のように分類した。

一、太平天国時期／二、清仏戦争時期／三、日清戦争時期／四、義和団事件時期

第二節は、外国誌に掲載された戦闘時事版画について考察した。これは、清末中国においてリアルタイムで外国人が収集し、印刷

物に掲載したものである。掲載記事には、外国人が中国の戦闘時事版画をどう理解したかが書かれている。つまり、戦闘時事版画の役割を知らない外国人はこれを「新聞報道」と捉え、その虚偽報道を批判したのである。

また、出版物の出版年月から、戦闘から販売までのおよその制作日数を割り出した。それによって戦闘時事版画は随時制作・販売されていたことも判った。

◇第三章 戦闘時事版画の形成と展開

第一節は、戦闘時事版画と伝統的な「得勝図」との関係を見た。戦闘時事版画には得勝図の形式を踏襲するものがあり、さらに民間の版画でありながら、その表現や発想の源は、皇帝が作った得勝図が持つ中華思想(漢民族が古くから持ち続けた自民族優越の意識)に拠っている。

第二節は、戦闘時事版画に書き込まれた韻文と大衆文藝との関係を検討した。太平天国時期から清仏戦争時期にかけて、韻をふんだ詩句を彫った戦闘時事版画が多く見られる。この詩句は観賞者が愉しむとともに「唱詞」でもあり、販売する者はこの詞に俗謡などの節をつけて唱い、客の注意をひいたといわれる。

戦闘時事版画と戯曲・通俗小説との関係では、太平天国をテーマにした「芝居仕立て」の版画が遺っているものの、その後には戯曲・通俗小説との明瞭な関係を示す版画は見られない。これは、清仏戦争時期になると新聞が普及し、口伝え(語り物や芝居も含む)で消息が伝達されていた太平天国時期とは、ニュースの伝達媒体が変化したこととも無関係ではないだろう。

第三節は、新聞・画報の記事と戦闘時事版画との関係を見た。

一八七二年に上海で中文の新聞『申報』が発行されると、人々の情報源はそれまでの「街道消息」(巷の噂)から新聞報道にシフトしていく。清仏戦争が始まると新聞は連日のように戦況を伝え、いやが上にも庶民の関心事となった。上海の巷では木版の戦闘時事版画が種々出まわっていた。これにヒントを得た『申報』の発行元は「文語で書かれた『申報』を図で補う」というコンセプトによって、石版印刷の『點石齋畫報』を企画出版し、これが爆発的に売れた。新聞の記述より詳しい図を描き、文語の記事よりも平易な解説文が付いていたからである。民間の版画工房が、『申報』や『點石齋畫報』をニュース源として利用して戦闘時事版画を制作したものもある。

これとは別の形で、『申報』と密接な関係を持つ戦闘時事版画集が存在した。それはフランス国立図書館写本部とロシア・イルクーツク州立藝術博物館に収蔵される石版印刷の戦闘時事版画で、『申報』紙上に広告された『越南捷報』であった。この版画集は『點石齋畫報』を創刊する前に、一種の市場調査として発行された可能性がある(本稿：第三節の二)。

◇第四章 版画制作からみた戦闘時事版画

戦闘時事版画を詳細に見ると、構図が類似したものの、表象部分が同一のものなどがある。この類似の流れを整理し、どういう原因から発生したものかを考察した。人気があつてよく売れる図は同時期でも模倣され、いわゆるコピー商品が売り捌かれた。また、制作当初に書き込まれた文字を変更し、時期を越えて後の戦闘時

事版画に生まれ変わっている例もある。

売れ筋の図はそれ自体が「粉本」(絵手本)になり、同一の図像が反復使用される。これは民間版画の制作ではしばしば見られる現象である。戦闘時事版画も同様に、よく売れる図は反復使用され粉本化して、一つのパターン(型)が定着する。パターンが庶民に浸透すると、その後はこの型が「絵文字」のように意味を持って使われる。

◇第五章 結論

ジャーナリズムが確立した近代社会から見ると、戦闘時事版画は「ニュース画報」と思われがちであるが、本来の役割は「観て楽しむもの」であり、これは観賞の対象である「年画」と同じである。戦闘時事版画には「報道」の役割はなかった。

太平天国時期から義和団事件まで十九世紀後半の戦闘時事版画を概観して、その時代変化を図式化した。太平天国時期には多く書き込まれていた韻文は、清仏戦争、日清戦争と時間が経つにつれて減少した。その逆に、清仏戦争時期に表れたニュース画報の形式(写真のような構図)は、時間を追うに従って増えていった。しかし、太平天国から義和団事件までの約半世紀、社会が近代化へと大きく変化していく間も、戦闘時事版画の深層には得勝図の伝統的意識(中華思想)が流れ、庶民の精神的支えとなっていた。

戦闘時事版画は、庶民が年画に求める吉祥祈願と観賞・娯楽の機能と同様のものを持ち、伝統的思考法(中華思想)を極めて率直に映し出している。戦闘時事版画から、十九世紀後半の社会

を覗き見、文化を知ることが出来るのである。

◇附記

◇附表

◇資料

(謝辞)

本論の執筆にあたり、埼玉大学教養学部教授の大塚秀高先生、関口順先生、小谷一郎先生、初山明先生の懇到なご指導を賜りました。

次の方々には、貴重な助言と資料・情報の提供をいただき、また各機関には資料提供のご協力をいただきました。記して衷心よりの感謝を表します。

Boris Rittin, Frances Wood, Graham Hurt, Hamish Todd,
Ohsuka Yasuo, Beth McKillop, Yasumura Yoshiko, Mary
Ginsberg, Nathalie Monnet, Christoph Marquardt, 潘清海、謝昌一、
小川陽一、藤本幸夫、大井剛、佐藤悟、瀧本弘之、小林邦
久、陸偉榮、新江利彦、韓冰の各氏(敬称、所属は略しました)。
大英図書館 ロンドン大学東洋アフリカ研究学院図書館
フランス国立図書館 東京都立中央図書館 東京大学総合
図書館 東京大学東洋文化研究所図書室

第三章 戦闘時事版画の形成と展開

第三節 新聞、画報と戦闘時事版画

二、『點石齋畫報』より前に発売された石版印刷画集

1 『申報』に広告された石版印刷の戦闘時事版画

光緒十年三月二十六日（一八八四年四月二十一日）の『申報』の広告頁に、「越南捷報」と題した次のような広告が出ている（句読点は筆者による）（図18）。

法越搆兵劉團疊勝電傳捷報
未若畫報之詳今得在越助事
友之善繪者遂戰必圖集其大
勝者四郵寄來速展閱之下令
人色舞眉飛可稱克敵實記想
吾華人敵賊同仇定以先親為
快因倩西人鑄為銅板印入赫
誠共合四圖計洋一角二分盡
售另議 乙（二）

上海三馬路西福甯里第六家
便是分售小東門內馬姚術中
平江吳西畫錦里顧春記

図18 広告「越南捷報」

法越搆兵，劉團疊勝。電傳雖捷，未若畫報之詳。今得在越訪事友之善繪者，逢戰必圖，集其大勝者四，郵寄來滬。展

閱之下，令人色舞眉飛，可稱克敵實記。想吾華人敵愾同仇，定以先親為快。因倩西人鑄為銅板，印入赫蹶。共合四圖，計洋一角二分，躉售另議。

（仏越が兵を構え、劉（劉永福）軍が勝利を重ねている。電信が伝えるニュースは速いけれども、画報のように詳しくはない。このたび、越南に所用で滞在する絵の上手な友人が〔注〕、戦いに遭うたびに絵を描き、大勝した四枚の図を集めて上海に郵送してきた。ひろげて見ると、小躍りしたくなる嬉しいもので、克敵実記といってよい。我が華人はみな敵に対して敵愾心を持っているから、きつと一刻も早くこれを見たいであろう。西洋人に銅版に彫らせ、薄い小さな紙に印刷した。全四図、値段は洋一角二分で、卸値は別途相談する。）

上海三馬路，西福甯里第六家便是分售。

小東門内，馬姚術中，平江吳西，畫錦里，顧春記。

（上海三馬路・西福甯里の六軒目の家において小売りする。

小東門内・馬姚術の中の平江・吳西の畫錦里の顧春記。）

図の由来と価格などを説明したあとに続いて、小売り販売所と広告主が示されている（広告文と住所の間にある注音字母のような記号については不明）。

◇住所について

まず、『越南捷報』の図を販売するとした住所の「上海三馬

路西福甯里第六家」から考えたい。

「三馬路」は現在の漢口路である。バンド(外灘)から西に向かって東西に走る大馬路(現・南京東路)があり、その南に平行して二馬路(現・九江路)、さらにその南に三馬路(漢口路)が通っている。

一九一七年の地図ではあるが、参考に「上海英租界分圖」(注)を見ると、南北に走る湖北路と三馬路との交差点を北に向かい、二馬路との中間あたりの西側に福甯里の出入口がある。福甯里は路地の奥で四角形を呈し、西側は大牲坊と繋がって浙江路に出る(参照：資料六)。出入口が浙江路に近い福甯里を便宜上「西福甯里」と呼んだのではないだろうか。販売所は三馬路に近く、浙江路から入った福甯里の入口から六軒目であったと思われる。

「小東門内馬姚術中」の住所は、広告主(顧春記)のものと考えるのが妥当であろう。

「小東門」は、上海旧城の城門の一つである宝帯門の俗称である。現在の道路名でいえば半円を描く人民路と東西に延びる方浜中路東端の交差点あたりにあった。

「馬姚術」は、一八九八年の地図「新繪上海城廂租界全圖」に見える。上海旧城(旧城)の中心部に上海県署があり、その北を流れる河は小東門を通過して黄浦江に出る。河の北側に垂直に交わる馬姚術がある。現在の馬園街にあたる。馬園街は五十メートルほどの短い通りであるから。「その中」という住所表記で充分なだろう。

◇画店について

「平江吳西畫錦里顧春記」は広告主と考えるが、「顧春記」が店名で、版画を制作・販売する画店と思われる。「平江、吳西、畫錦里」は画店の出身地を示すものだろう。

平江は現在の蘇州を指す。蘇州は春秋時代の吳国の都であり、古吳とも姑蘇とも呼ばれる。

「吳西、畫錦里」については、宋代の蘇州の地名をまとめた『宋平江城坊考』(王審編、江蘇古籍出版社、一九八六年)の「卷一、西南隅」のなかに「畫錦坊巷」の名が見える。

明の成化十年(一四七四)の序がある『姑蘇志』(影印本・吳相湘主編、台湾学生書局、一九六五年)では、卷十七に「西南隅坊十七」の一つとして畫錦坊の名が挙げられている。吳畫錦という人名からついた坊名という。

『申報』の広告(光緒十年)と時期が近い、『蘇州府志一百五十卷首十卷』(道光四年序刊本)や、『蘇州府志一百五十卷首三卷』(光緒九年序刊本)にも、「畫錦坊」の名がある(資料七(略))。

伊原弘氏(中国・中世史)のご教示によれば、畫錦坊は蘇州西南部の胥門近くにあり、「坊」は「里」とも称されるとのことである。広告がいう「畫錦里」は「畫錦坊」と同じであろう。

現在の地図では、旧城壁の南西角にある画景坊あたりと推測する。

蘇州にあった民間版画の工房(画店)は、太平天国の乱の際に戦火に遭っている。また太平天国後、上海での商業活動が盛んになるにしたがい、画店は上海に移転したり、支店を出したといわれ、蘇州にいた画師が、彫り師や刷り師を伴って上海に出て開業した

ともいう(注3)。

現在のところ画店「顧春記」の名は、同時期に制作された民間版画には見られず、実在した確証はないが、広告から、顧春記は、蘇州(平江)西南部(呉西)の昼錦里(坊)にあった画店で、『申報』の広告を出した当時は上海に移っており、屋号の前にその出身地を示している、と読み取れる。

しかしながら地名に東西南北がつくばあいは上につくことが一般的であるから、「平江呉・西昼錦里」の可能性も残っている。前出の『上海英租界分圖』(一九一七)には、福甯里の東側の九江路と漢口路の間に「西昼錦里」の地名がある。そこから更に東に向かうと申報館がある。『申報』(申報館)・福甯里・西昼錦里と、広告「越南捷報」にまつわる名が三馬路周辺に点在しているのは単なる偶然だろうか。この広告の内容や広告主についてはさらに検討が必要と思われる。

◇石印版画集『越南捷報圖』について

広告「越南捷報」の実物と思われるものが、フランス国立図書館写本部に收藏されているのを二〇〇六年三月の調査で見つけた。『越南捷報圖』の文字を印刷した袋と、中に入っていたと思われる四図が揃って保存されている。図書館側は收藏するときに、これが一組であることに気づいた様子がない。なぜなら、版画を入れていた袋には收藏番号がついておらず、版画に付された收藏番号は、画自身がつ番号を無視した順になっている(袋は、当部門の中国研究者であるナタリー・モネ女史に説明して、新たに收藏番号をつけてもらった)。

袋(13808-37)(図19)は、タイトルの『越南捷報圖』が中央に大きくあり、その下に販売所の場所が「上海三馬路西首大新街福甯里第六家發售」と二行にわたって入っている。これは『申報』広告の「上海三馬路・西福甯里第六家」と同じ住所である(住所については後述する)。

袋は封筒状で、長さ二六〇ミリメートル、幅は一〇九ミリメートルである。入っていたと考えられる版画は次の四点である。「画題は「」に、「」は收藏番号、「」内は画の寸法を縦・横の順で示す。単位はミリメートル。」

- 「劉提督生擒李威利 第一圖」 (13808-6) (226×310)
- 「彭大哥馬督師防邊 第二圖」 (13808-5) (222×310)
- 「五路大軍恢復北甯 第三圖」 (13808-4) (228×313)
- 「北甯水戰大捷 第四圖」 (13808-7) (227×311)

この四点はすべて、洋紙に石版印刷(石印)したものである。広告では「西洋人に銅板を彫らせて印刷した」と書いているが、実は石印であった。

用紙の大きさは四図ともほぼ同寸で、縦が二五〇、横が三五〇ミリメートル前後、B4サイズに近い。これらの図は、横幅を四つ折りにした跡がある(図20参照)。つまりこれは、幅八五ミリメートル前後に四つ折りし、図19の袋(幅一〇九ミリメートル)に入れた痕跡であろう。

この四枚一組の石印『越南捷報圖』は、ロシアのイルクーツク

州立藝術博物館にも保存されているが、イルクーツクの場合は第二図が缺けている。

『越南捷報圖』が石版印刷であるという鑑定は、肉眼での確認以外に、図のそばに「トンボ線」が遺っていることから言える。トンボ線とは印刷用語で、印刷した紙を切断する目安として、縦、横の十字形に線を入れたものをいう。『越南捷報圖』の図は、複数の図を一枚の版に製版し、印刷後に切断したのである。複数の図を一枚の大きな紙に印刷すれば、印刷回数(時間)が節約できる。木版印刷ではトンボ線は使わない。また、銅版画では大判の銅版や、大判の印刷機は高価であるから、複数の図を一緒に製版する可能性は少ない。

石印の『越南捷報圖』を、広告では「銅版画」と謳ったのはなぜか。

中国の庶民が石版印刷物に触れ、その名が知られるのは『點石齋畫報』(石版印刷)の発行後である。『點石齋畫報』の創刊は光緒十年四月十四日(一八八四年五月八日)であり、この広告掲載から半月以上も後のことである。

しかし銅版画の名称は、乾隆時期の銅版画を始め、キリスト教関係の図像などで知られていた。また、上海などの租界には西洋の新聞、画報、書籍も入っていた。これらには銅版画を使った挿絵が入っていた。

当時はまだ石版印刷の名称が一般に馴染みが薄く、銅版画としたほうが通りがよかつたためと思われる。

その一般の認識を裏付けるような戦闘時事版画がある。イルクーツク州立藝術博物館蔵の「克復北寧河内水戰劉軍得勝新圖」(イ

ルース)は、木版であるにもかかわらず「銅版画」と書き入れている。タイトルの下に書かれた文字は「香港新報局繪刻銅版全圖」(香港新報局が制作した銅版全図)というものだ。香港といえば、西洋人が住み、彼らの版画は「銅版画」であるという人々の認識を利用した宣伝文句ともとれる。

清仏戦争当時の西洋の画報、たとえばイギリスの『絵入りロンドン・ニュース』やフランスの画報『イリュストラシオン』では、まだ写真の挿図は始まっていない。挿図はほとんどが木口木版で作られ、ときには石版の図が入った。木口木版には写真を模刻したものもあり、写真よりも精密に細部を復元している。木口木版は柘植などの硬い木を使うため、鉛活字と一緒にして印刷することが可能である。木口木版は銅版画と同じ彫刻刀(ビュラン)というを使い、細かい線が表現できる。線の強弱や密度で陰影や立体感が出る。刷り上がりの図は銅版画に酷似し、素人にはどちらで制作したものか判らない。みな銅版画と思っても当然である。

『越南捷報圖』の広告が、一般に馴染みのない「石版画」の名称を使わずに、知名度のある「銅版画」と宣伝したのはこんな理由からであろう。

さて、越南にいる人が描いたという『越南捷報圖』はどんな図であろうか。四図の内容を見ていこう。

①「劉提督生擒李威利 第一圖」(図21)

この図は、一八八三年五月十九日(光緒九年四月十三日)の戦闘を描いている。劉永福は黒旗軍を率いて北ベトナム・ハノイを攻撃

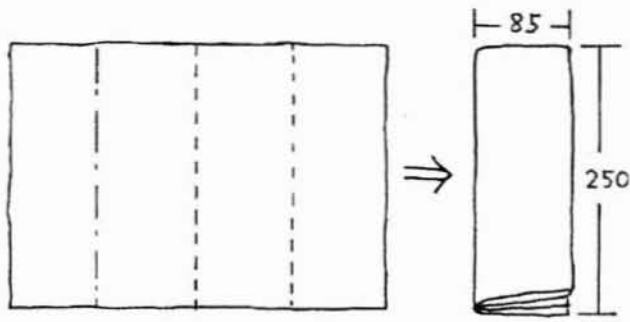


図20 石版画を四つ折りにして、図19の袋に入れ販売した。



図19 『越南捷報圖』の袋

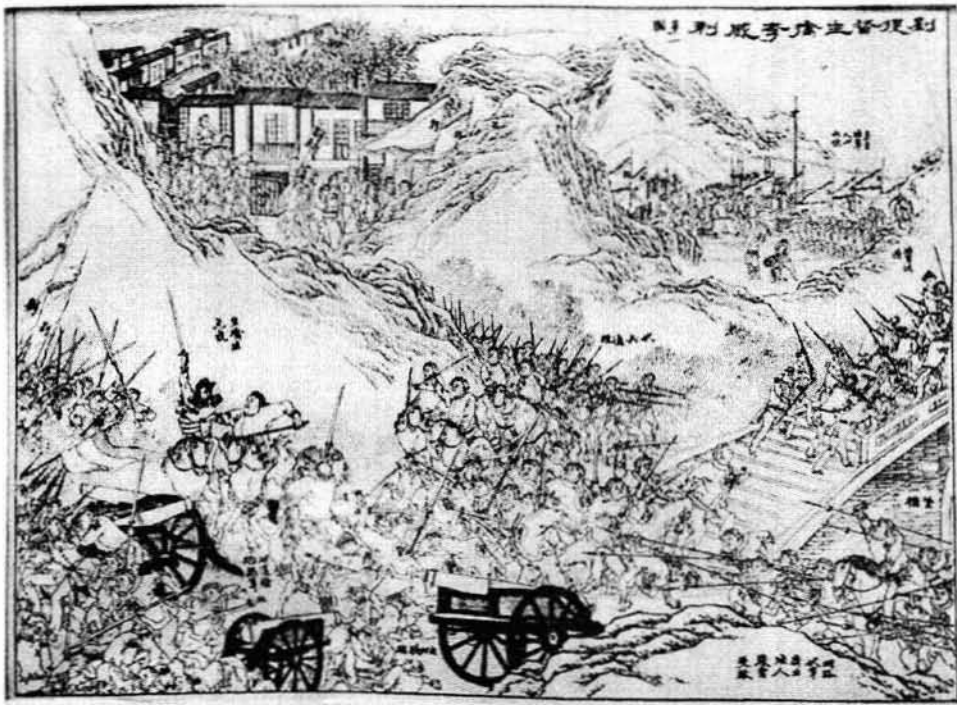


図21 「劉提督生擒李威利 第一圖」

し、占領していた仏軍を破った。さらにハノイ郊外の紙橋における戦闘で、仏海軍大佐のアンリ・リヴィエール(中国語表記は李威利)を戦死させた(注4)。

この消息は、『申報』の光緒九年五月四日(六月八日)の「越南軍報」で第一報が伝えられ、その後も詳細が繰り返して掲載された。劉永福はこの戦闘での活躍がグエン朝から評価され、三宣正提督に昇格した。劉永福と黒旗軍はその後とも活躍を続け、この年の秋、清朝政府からは仏軍との戦闘費用として銀十両が与えられた。

② 「彭大司馬督師防邊 第二圖」(図22)

彭大司馬は彭玉麟(一八一六—一八九〇)のことである。曾國藩に従って、湘軍水師で活躍した。太平天国の平定に功があり、湘軍の代表的な將軍の一人である。一八八三年に兵部尚書になり、仏軍がトンキン進攻を激化させているため、広東防衛を命ぜられる。大司馬はもと軍務を掌る役職名で、清代には兵部尚書の別称であった(注5)。

図は、海岸地帯を警備してまわる部隊の行列を描いている。図の中央上部には、「瓊州」の城門が見える。画面左上方の海面には、少なからぬ船が浮かんでいる。瓊州は海南島にあり、瓊州海峡に面している。沖に見える山並みは対岸の雷州半島だろう。

③ 「五路大軍恢復北甯 第三圖」(図23)

北ベトナムの北甯(バクニン)に向かって、五方向から華軍が進攻し、北甯城門外で仏軍と白兵戦を演じている。「生擒法頭目」

(仏軍の將を生け捕る)、「法兵萬二千地雷轟斃」(二万二千の仏兵が地雷の爆発で死亡)、「肉搏相戰」(白兵戦)などの文字が書き込まれている。

これは特定の戦闘ではなく、一八八三年から繰り返されていたバクニンの攻防戦を描いたともいえるが、この石版画が売り出された時期(一八八四年四月二十一日)を考えると、一八八四年三月八日(光緒十年二月)に清軍が大反撃に出て、バクニンを仏軍の手から恢復したことを描いているのではないだろうか。

④ 「北甯水戰大捷 第四圖」(図24)

北甯城の側を流れる富良江での戦いを描く。港での戦闘のように見えるが、河川での戦いである。画面中央上には北甯城の城壁が見え、そこから華軍が繰り出してきた。河岸に築いた砲台から、劉軍が大砲や銃で仏軍船を攻撃している。いままさに大砲が命中して、仏軍船が沈没せんとしている。右手の大きな仏軍船には劉軍兵がよじ登り、敵に侵入された仏兵は甲板を逃げまどっている。逃げ場を失った兵は川に墜落している。左手には華軍の船団を描き、船には「劉」印の旗が立つ。甲板で椅子に座って戦闘を見る人物が劉永福であろう。富良江に浮かぶ両軍の軍船は、帆柱が高い大型の蒸気船で、川の上流を運航するには不向きな船と見える。

富良江は、ベトナム北部最大の川、紅河(ソンコイ川)の古名である。紅河は、雲南の大理に源を発し、雲南省内では元江と呼ばれる。本流は、劉永福が根拠地としていたラオカイ(保勝)からベトナムに流れ込み、ハノイの北西方向からハノイに入り、トンキン

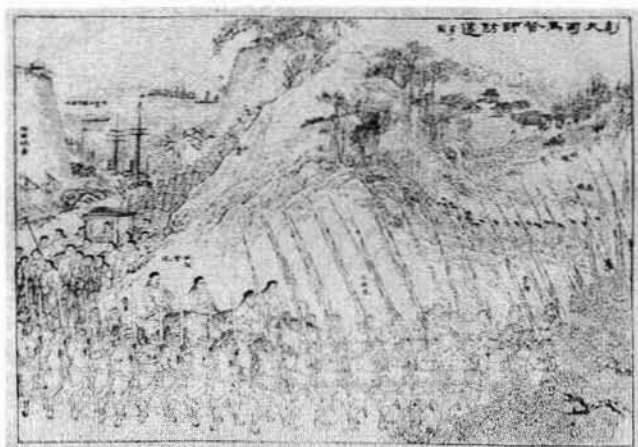


図22 「彭大哥馬督師防邊 第二圖」



図23 「五路大軍恢復北南 第三圖」

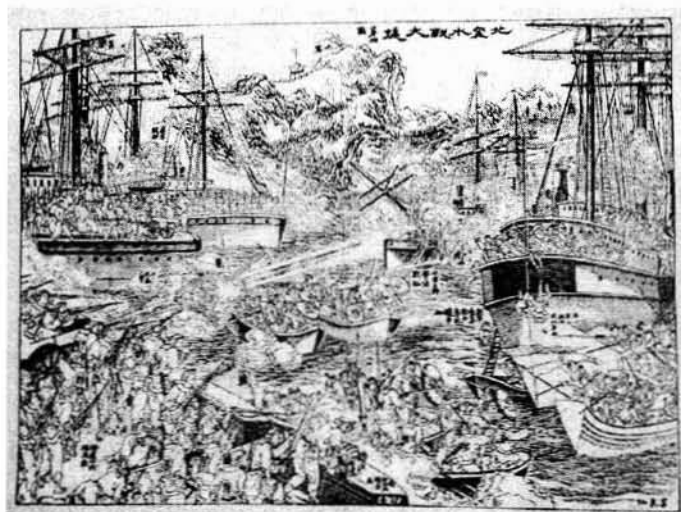


図24 「北南水戰大捷報 第四圖」

ン湾に注ぐ。しかし、バクニンはハノイの北東方向に位置し、紅河には沿っていない。紅河の支流を「富良江」としているのか、別の河川であるのかは不明である。

船の大きさや河の名など、図の正確さは疑わしい。

この戦闘を特定できる文字は記入されていないが、第三図と同様に、一八八四年三月八日(光緒十年二月)の清軍のバクニン恢復ではないか。

『越南捷報圖』の内容は、前年から再び激しくなったベトナムにおける仏軍と清軍・黒旗軍の戦闘図が三点と、広東の防衛をテーマにしたものが一点であった。新聞広告は「ベトナムにいる絵画に長じた友人が描いた」としているが、現地で実写したものでないようだ。

半月後に出る『點石齋畫報』は、全ての図に画家の署名があるが、『越南捷報圖』にはいずれも署名がない。しかし、『越南捷報圖』は、『點石齋畫報』と比較して遜色なく、駆け出しの画家の作とは見えない。どの図も時間をかけて丁寧に描かれ、むしろこちらのほうが出来がよいくらいである。

旧曆二月上旬のバクニン恢復の消息は、同二月下旬には上海の人々の知るところとなった。バクニンの攻防は前年から続いていることであるが、一時的であるにせよ、バクニンを恢復した二月の勝利は、人々を喜ばせた。石印『越南捷報圖』の第三図(五路大軍恢復北甯)、第四図(北甯水戰大捷)は、この最新の勝利を描いたのである。

第一図は前年の戦闘であり、第二図は光緒九年以降のことで、

時期は限定されない。第三、四図は二月の戦闘を描いたとすれば、石印『越南捷報圖』の制作時期は、旧曆の二月下旬以降、発売までの約三週間の間に絞られる。

『越南捷報圖』は、『點石齋畫報』のように画中に詞書きはないが、鑑賞者に配慮して、図の中に説明の文字を書き込んでいる。当時、民間版画工房・画店が制作した戦闘時事版画の多くは、みなこのように説明の文字を入れている。この点から、『越南捷報圖』は民間版画工房が制作したか、あるいは彼らの助言を受けたことがうかがえるが、『越南捷報圖』の出版については、別に考察する(後述)。

2 石版から木版への複製

石印の『越南捷報圖』と同じ図柄で、彩色した版画が存在する。同じ画題で、寸法もほぼ同じであるが、すべて手漉き紙に木版多色刷(套版)したものである。これらは、注意深く見なければ石印に着色したものと誤認するほど精密に石印の線を復元している。

『越南捷報圖』は、石印も木版も、俯瞰した視点から広角の視野で描き、繊細な描線で写實的に風景を表している。これは伝統的な民間版画の画法にはなかった描き方である。木版の『越南捷報圖』が先に制作された可能性は小さい。石印の『越南捷報圖』をもとに木版が複製されたと見るのが妥当であろう。

套版の『越南捷報圖』(以下、複製套版という)の線版は、石印の『越南捷報圖』(以下、石印版という)の細密な文字や線描を忠実に再現している。画面の寸法はほぼ同じである。これは石版の図を

版木にじかに貼り付けて彫った(すなわち、石印の図を下絵にした)、いわゆる「かぶせ彫り」と呼ばれる方法で複製したと思われる。

複製套版は、忠実に石印版の描線をなぞっているとはいえず、木版多色刷としての工夫も見られる。例えば、第三図の中央にある松は、松葉が少ない。第四図の船の帆柱は、石印では線を重ねて黒く見せるが、木版ではその線が少くない。松葉や帆柱には色版を刷るので、墨版の線を少なくしているのである。

複製套版の図が、石印版とあきらかに異なる個所は、図の周りを囲む野の四隅である。石印版の野は、角が直角に交差しているだけであるが、複製套版は四隅角の内側に小さな四角を作って装飾している。

以下に、石印版の各図とそれぞれの複製套版の寸法を比較した。画題ごとに、フランス国立図書館写本部蔵(石印)、イルクーツク州立藝術博物館蔵(石印)、フランス国立図書館版画部蔵(套版)の順に並べ、それぞれの収蔵番号、版面の大きさ、印刷法を示した。

「劉提督生擒李威利 第一圖」

(13808—6) (226×310)	石印墨一色
(イル—695) (220×309)	石印墨一色
(0e173—38) (225×309)	木版多色刷

「彭大司馬督師防邊 第二圖」

(13808—5) (222×310)	石印墨一色
---------------------	-------

(0e173—44) (222×310) 木版多色刷

※本図はイルクーツク州立藝術博物館には所蔵がない。

「五路大軍恢復北甯 第三圖」

(13808—4) (228×313)	石印墨一色
(イル—693) (228×311)	石印墨一色
(0e173—39) (226×311)	木版多色刷

「北甯水戰大捷報 第四圖」

(13808—7) (227×311)	石印墨一色
(イル—696) (225×310)	石印墨一色
(0e173—45) (225×311)	木版多色刷

版面の寸法には、数ミリメートルの差が生じている。フランス蔵とロシア蔵の石版同士にも、石版と木版の間にも差が見られる。この程度の差は、彫版や印刷の過程で、あるいは裏打ちの際に、紙の伸縮によって生まれるものである。

以上の石印版はすべて洋紙を用い、複製套版はすべて手漉き紙を用いている。使用した紙にも、西洋印刷術と伝統印刷術の違いが表れている。

複製套版はこの画店が制作したのかは不明である。いったん世に出た版画は、それを複製するのは誰でも自由である。現在でいうところの版權意識はない。発売元はもとより、どの画店でも複製が可能だ。売れ行きが良さそうな図は争って複製

された。

複製套版の他にも石印『越南捷報圖』を模した木版画がある。

石印版の「劉提督生擒李威利 第一圖」(図21)と同じ画題で、構図が相似している木版画の「劉提督生擒李威利」(図25)である。これは套版ではなく墨一色である。本図は複製套版に比べて画面が大きい。石版と複製套版の寸法がおおよそ二二五×三二〇であるのに対して、図25は、四七四×五九六である(単位はミリメートル)。縦横の拡大比率は若干異なるが、全体として約二倍に拡大している。

木版の「劉提督生擒李威利」は、石印の図21が表現する場面とほとんど同じであるが、石印よりも人物を大きく描く。風景との均衡は崩れたが、戦闘の中にある臨場感が増した。図の右上にある劉永福陣営を拡大して描き、ここでは仏兵の首切りが執行中である。そばに「斬首法軍人心大快」(仏軍の首を切り、人心は大いに愉快である)の文字が書き込まれている。

絵としてのまとまりは石印(図21)のほうがある。木版画(図25)は民間版画の画法に従い、構図が平面的で説明的な描写であるが、庶民の「見たいもの」、「嬉しいもの」が強調して描かれている。図25は寸法から言っても「かぶせ彫り」ではなく、石印版あるいは複製套版の図を模写・模倣したものであろう。

3 『越南捷報圖』の発売について

『越南捷報圖』は石版印刷で制作された。これはそれまで木版印刷で制作されてきた戦闘時事版画にとって画期的なことであった。『申報』紙上における民間版画の発売広告は、その前後に例がなく極めて特異である。同じ石版印刷の『點石齋畫報』が発刊される半月前に、『越南捷報圖』は発売された。以上のことから『越南捷報圖』の制作・発売には検討すべきものがあり、その制作と販売のねらいを考えてみたい。

(1) 店名と画家について

前述したように、販売時の袋(図19)には住所の記載があるのみで、取扱店名あるいは発行店の名がなく、新聞広告にあった「顧春記」の文字もない。同時期の戦闘時事版画には発売元、卸元などを記したものがあがるが、それらはみな「上海××の〇〇」と、場所と店名を明記している。『申報』の広告は販売所の場所を「福寧里の六軒目の家」と告示し、袋の住所も同所であるが、袋に店名がないのはどういうことだろうか。この「福寧里の六軒目」は常に店があるのではなく、臨時の店か、小さな印刷所か、または個人の家あるいは画とは無関係の店舗に委託販売していたのではないだろうか。

前述したことであるが、販売する場所が漢口路周辺という点に注意しておきたい。福寧里から漢口路に出て東に向かうと、望平街(現・山東中路)との交差点に申報館があった(注6)。五百メートルほどの距離である。

『越南捷報圖』は四図ともに同一の筆致で細く丁寧な描かれ、技倆は『點石齋畫報』の画家に匹敵するほど高い。このように高



図25 「劉提督生擒李威利」（木版）フランス国立図書館蔵

水準の画家でありながら、四図ともに署名がない。『點石齋畫報』には毎図に画家の書名があるのに何故であろうか。

『點石齋畫報』創刊以後、吳友如と彼の一門の西洋画の写実を取り入れた画風が一世を風靡したというのが、中国近代美術史の定説であるように、吳友如のような画風はそれ以前には見られなかったものである。

『越南捷報圖』の画風は、『點石齋畫報』を描いた吳友如と彼の周辺の画家に共通するものがある。もっと直截にいえば、吳友如の個性が強くにじみ出ており、この時期に吳友如風の画を描く画家は、吳友如本人以外には考えにくい。吳友如の作と言ってよいであろう。

『申報』の広告では「在越訪事人」が描いた戦闘図と宣伝したため、上海在住の画家の名を入れると齟齬が発生する。また、後で考察するが、『越南捷報圖』は市場調査のための試作品であったと思われるから、画家の署名もせず、画店の名も入れず、いわば覆面で発行されたのであろう。

(2) 申報館と民間版画の関係

まず、新聞『申報』と民間版画の最初の接触をみておきたい。

『申報』を発行した申報館の傘下には、申昌書局、点石齋石印書局、図書集成鉛印書局などがあつた。申昌書局は、鉛活字で書籍を印刷出版し、点石齋石印書局は、画集や挿絵本などを石版印刷した。石版印刷は、写真技術を応用した縮小印刷が可能で、手書きの原稿や稀覯本、辞書などの複製に適

していた。点石齋石印書局は、科挙の試験に必需品である書籍を小型にして大量に発行した。『點石齋畫報』の細かい描写は、原画を縮写印刷することによって実現したのである(注7)。

一八六〇年以降、蘇州から上海に移動した民間版画の制作者たちは、光緒年間になると、西洋趣味が加味されて、洗練された優雅な雰囲気を持つ上海特有の版画を作っていた。彼らの多くは、上海の旧城内にある城隍廟と豫園のそばの繁華街、旧校場路などに店を構えていた。

光緒十年(一八八四)の『申報』新年号は、第一面に吉祥画を掲げた。ちなみに前年の新年号は、慶賀の文字だけである。また、『點石齋畫報』発行以後の光緒十一年新年号(正月六日)は吳友如の絵で、「人壽年豊」の画題と「申報館拜賀新禧」などの文字が入っている。『申報』の実物は未見のため、これ自体が石版印刷なのか、石印を凸版にしたものかは不明であるがこんなところにも吳友如の人氣が偲ばれる。

光緒十年の『申報』新年第一号は、旧正月六日(一八八四年二月二日)の発行である(図26)。第二面全面を使って、新年の挨拶として「申報館拜賀新禧」の文字と図を掲載した。図は「陞官・發財」の貴子と童子を描き、新しい年に出世し、財が富むことを祝す。この図柄は、新年を寿ぐ年画(室内の裝飾画)に多く見られるものだ。図は柔らかな描線で優雅である。画家名はないが、洗練された風格は上海や蘇州の民間版画に近い。この「陞官發財圖」は、『申報』紙上に最初に登場した民間版画風の画であり、申報館あるいは経営者のメイジャーと民間版画制作者とが、当時すでになんらかの接触を持っていたことを物語っている。

光緒十年の春は、ベトナムでの清仏の衝突が激しくなるとともに、『申報』のベトナム報道も頻繁になっていた。民間版画工房の経営者は、社会の関心の高まりに呼応してベトナムでの戦闘図(木版画)を続々と発売した。説明文字が入った一枚刷りの図で、本論でいうところの戦闘時事版画である。

木版の戦闘時事版画は、『點石齋畫報』創刊以前に数多く発行されていたようである。フランス国立図書館版画部が収蔵する(Oe173)「レクシオン」を例にとると、『點石齋畫報』創刊以前の発行時期が明記されているものが、全四十八点中十一點ある。以下に、「画題」、(「收藏番号」、版画に書かれた年月・季節を示す(月順に並べ、「春」のみ表記のものは後ろに配した)。

- 「劉提督北寧大破法師全圖」 <Oe173—6> 甲申春正月
- 「北寧太原全勝圖」 <Oe173—11> 甲申仲春
- 「恢復北寧」 <Oe173—13> 光緒甲申二月
- 「劉提督克復水戰得勝全圖」 <Oe173—15> 光緒甲申二月
- 「劉軍克復北寧得勝圖」 <Oe173—7> 光緒十年三月
- 「克復北寧全圖」 <Oe173—9> 光緒甲申之春三月
- 「劉軍大破法國水師全圖」 <Oe173—28> 光緒甲申春三月
- 「夜克北寧」 <Oe173—10> 光緒暮春
- 「紅河全捷」 <Oe173—29> 光緒甲申暮春
- 「劉提督鎮守北寧圖」 <Oe173—12> 光緒甲申之春
- 「北寧大捷」 <Oe173—16> 光緒甲申之春

『點石齋畫報』の創刊号でメイジャーが言う、「巷には戦闘を描いた版画が売り出され、人々はこれを求めてきままに談論風発している」とは、このような状況を指しているであろう。メイジャーは一八七七年に、外国誌の図を転載した『寰瀛畫報』を出版したが、失敗している。「西洋人が描いた挿絵が中国人の好みに合わなかったため」と総括して「中国人好みの画」を研究しようだ。中国絵画と西洋絵画の画法の違いに気づき、この結論は『點石齋畫報』創刊の挨拶で開陳している(注)。

中国人には中国の画法で描いたものが一番理解されると知ったメイジャーは、当然、大衆に人気がある民間版画を注目したのであろう。遅くとも光緒九年(一八八三)の冬には、メイジャーは民間版画の制作者に接近し、光緒十年の新年号の祝賀図を依頼する間柄になっていたのではないだろうか。

(3) 『越南捷報圖』の役割

石印の『越南捷報圖』は、『點石齋畫報』を発行する前の市場調査用として、メイジャーあるいは申報館が試作・試販したものだと思われる。以下はその経緯を推測したものである。

一八八三年、フランス軍は越南北部の内陸部へ侵攻を再開した。『申報』紙上のベトナム関係ニュースも数を増し、人々の関心事となっていた。同年五月、フランスの海軍大佐リヴィエールがトンキン地方で戦死したニュースは読者を喜ばせた。メイジャーは再び画報を発刊する好機と判断したが『寰瀛畫報』の失敗を繰り返さないように、図は中国人の画家——民間

版画の画師に描かせようと、彼らに接近した。

年が明けると越南での戦闘はさらに激化し、民間ではこれを描いた戦闘時事版画が大量に出廻った。これらは木版画であるが、これから出版する画報は石版印刷にしたい。すでに石印の工場が傘下であり、石印本を出版している。石印なら製版に時間がかからないので、迅速にニュースを掲載できる。しかし石



図26 「申報館拜賀新禧」

版画は一般にはなじみが薄い点が心配である。

文字のみの新聞『申報』を補うものとして画報を発行するのであるから、画は西洋の画報が載せる図のように、その現場を写し取った写真のようにしたい。民間版画の画師にこの新しい画法を指示した。しかし、西洋画の写実を加味した絵柄に、読者は拒絶反応を起ささないか。

読者の反応を見、売れ行きを計って、『點石齋畫報』創刊前に発行量も考えなければならぬ。このようなデータを得るために、メイジャーは民間版画の画師に戦闘図——『越南捷報圖』を描かせ、石版印刷で試作して、市場調査を企画した。

『點石齋畫報』は、『申報』の配達人が持ち歩いて販売する方法と、申報館が経営する書店で販売する方法をとったのであるが、購入を確実に期待できるのは『申報』の購読者である。『申報』の読者がどう反応するかをまず知る必要があった。そこで彼らを対象として『申報』に『越南捷報圖』発売の広告を出した。

『申報』の「越南捷報」広告で、「西洋人に銅板に彫らせた」と書いたのは、西洋の印刷として知名度があるのは銅版画だからであろう。さらに出来上がりの石印の図は、銅版画のように細かい描写であるし、銅版といえれば高級感を与えることも計算していたのではないか。

すでに有名な新聞社として地位を確立した申報館であるから、万が一失敗したばあいの方策も講じておかねばならない。出来れば申報館の名をふせて制作・試販するのが望ましい。それゆえに申報館は自らの店を持っていながら、「三馬路の西福寧里の六軒

目」を『越南捷報圖』の販売所とし、販売した袋にも店名を印刷していかないであろう。

『越南捷報圖』は、時の関心事を真に迫る描写と躍動感ある線で描き、メイジャーのもくろみどおりの人々の心を捉えた。売り出された石版画集はたちまち複製され、木版多色刷や、模倣・拡大した戦闘図未版が作られた。

『越南捷報圖』が宣伝文句に反して石版印刷であったことや図に画家の署名がないこと、発行者(画店)の名前がないことなどは、見る側にとってはどうでもよいことであった。

メイジャーは『越南捷報圖』の売れ行きを見て、石版画が、そして民間版画師による西洋風の写実的な描写が大衆に受け入れられたことを確認した。『點石齋畫報』も同様に受け入れられると自信を持ち、発行量の目安も掴むことができた。

以上のようなことが『越南捷報圖』を制作・販売した経緯と思われる。

石印『越南捷報圖』は、消費者の嗜好をはかる試作・試販品であり、現在でたとえれば市場の動向を見るアンテナショップの試作品というところである。臨時のアンテナショップであれば、販売所の店名がなく住所表示だけというのも領ける。広告にあった「顧春記」の存在は確認できないが、実在したとしてもやはり臨時の発売元にすぎず、実際は申報館あるいはその傘下の書局が制作・発行したものであろう。

(4) 『點石齋畫報』発行前の呉友如の戦闘時事版画

光緒十年の春に制作された戦闘時事版画で、特に注目したいのは、〈0e173-28〉の「劉軍大破法國水師全圖」である(図27)。画題の左側に「光緒甲申春三月友如」と書き、「吳猷印章」という白文の落款がある(友如は字、吳猷は名)。この図は吳友如の作である。

墨一色刷の木版画であるが、石印の『點石齋畫報』でみせる細密で躍動感のある描写がここにはある。また、画面の中にはいくつかの物語が展開している。これは民間版画の伝統的な表現形式であり、得勝図の「全景式」の流れでもある。しかし『點石齋畫報』の図になるとこの形式は使われず、撮影した写真のように一図には一場面のみが描かれる。

「劉軍大破法國水師全圖」の画面の枠線外には「越南電報館印」の文字があり(図28)、あたかもベトナムの電報館が印刷刊行したような表記である。しかし、同じ枠外に「文儀齋(齋)」という上海の民間版画店の名前と押印がある(図29)。実際には上海の文儀齋が制作した戦闘時事版画に、ベトナムからの速報を強調するために「越南電報館」と入れたと思われる。

『點石齋畫報』は旧暦四月の創刊であるから、図27はそれより約一か月前の制作である。これはちょうど石印『越南捷報圖』の制作準備時期と重なる。

二〇〇二年にイルクーツク州立藝術博物館において、この「劉軍大破法國水師全圖」(ヘイルーグ)を初見したときに筆者は、この図を見たメイジヤールが吳友如を『點石齋畫報』の主筆に抜擢したと推定した(注9)。しかし、石印『越南捷報圖』の存在とその広告文があきらかになった現在は、この推論は修正す

る必要がある。

前述したように石印版画集『越南捷報圖』は、吳友如の個性を強く匂わせており、彼の画として間違いないだろう。吳友如の原画として推考を進めていきたい。

「劉軍大破法國水師全圖」は、石印『越南捷報圖』の発売と前後して、あるいは発売準備中に制作されている。本図の細かい描写と躍動感溢れる筆致は、『越南捷報圖』の画風と酷似している。その描線は石版印刷かと思わせるが、実見によれば木版画である。画の寸法は二八八×五一三ミリメートルと、石印『越南捷報圖』の図よりも大きい。

「劉軍大破法國水師全圖」と『越南捷報圖』の制作日時はほぼ同時で、このとき吳友如は『點石齋畫報』の主筆として創刊の準備作業を進めていたであろう。それなのに何故、「劉軍大破法國水師全圖」のような木版画が存在するのであるのか。三つの可能性を考えた。

- ① 『越南捷報圖』の草稿の中から、不要になったものが流出した。あるいは売却された。
- ② 申報館が、吳友如の画の受容の可能性を見るために、文儀齋に委託して、石印より先にまず読者になじみのある木版印刷で試作した。
- ③ 『越南捷報圖』以外にも同種の石印の戦闘時事版画があり、それから木版に複製された。あるいは拡大模写して木版にされた。(参照：本節「2 石版から木版への複製」)

①の可能性がもつとも高いと思えるが、慎重を期したメイジャーが②を試みたことも否定できない。③の仮説は、元になった石版画が出現したとき明かになるだろう。

(5) まとめ

石印『越南捷報圖』の発行前後と『點石齋畫報』の創刊までを簡単にまとめると次のようである。

光緒九年(一八八三)

四月十三日(五月十九日)……リヴィエール將軍、ベトナム・

トンキン地方の紙橋で戦死。

光緒十年(一八八四)

正月六日(二月二日)……『申報』新年号が「申報館拜賀新禧」に民間版画を使う。

二月十一日(三月八日)……ベトナム北部の清軍が大挙して進攻を開始し、バクニンを恢復した。

正月から三月まで……ベトナムの戦闘を描いた民間版画が多数制作される。

三月……吳友如の戦闘時事版画が制作販売される。石印の『越南捷報圖』が制作中。

三月二十一日(四月二十一日)……『申報』に『越南捷報圖』発売の広告を掲載。

四月十四日(五月八日)……『點石齋畫報』創刊。

フランス国立図書館写本部門において、石印の版画集『越南捷報』を完全な形で発見し、『申報』の戦闘時事版画の売り出し広告と関係づけられたことで、推測できたことを再び整理しておくたい。

メイジャーは、清仏戦争への社会の関心の高まりを、画報(『點石齋畫報』)を出版する好機と判断して、慎重に出版の準備をした。光緒九年の遅くとも秋には、庶民に大きなマーケットを持つ民間版画の制作者への接近を始めた。

石印『點石齋畫報』を出す前に、まず試作の石版画集『越南捷報』を作ったが、この刊行には二つの実験的な企図が込められていた。第一には、大衆に受け入れられている中国人の民間版画の画師を使い、彼に西洋風の写実的な図を描かせること。第二は、一般にはいまだ馴染みがない石版印刷を使うことである。石印は、木版印刷や銅版よりも製版時間が大幅に短縮でき、ニュースが迅速に伝えられる。すでに上海では書籍類が石印で種々発行され、石版印刷機を使うのが一番経済的でもあった。しかし木版の民間版画に親しんでいる庶民に石版の戦闘時事版画は、どう受け入れられるかの観測気球の打ち上げが必要となった。そこで試作品『越南捷報』が制作・発売された。

結果は、『越南捷報』は複製品が出るほど庶民に歓迎された。写実的な画風も石版印刷も、西洋のものとして新鮮な眼差しで受け入れられたのである。これを見てメイジャーは『點石齋畫報』の創刊に踏み切った。その結果も大成功であった。旧暦の四月十四日に売り出した創刊号はすぐに売り切れ、十日後の第二号を出版するときには、第一号を数千冊増刷している(『申報』光緒十年

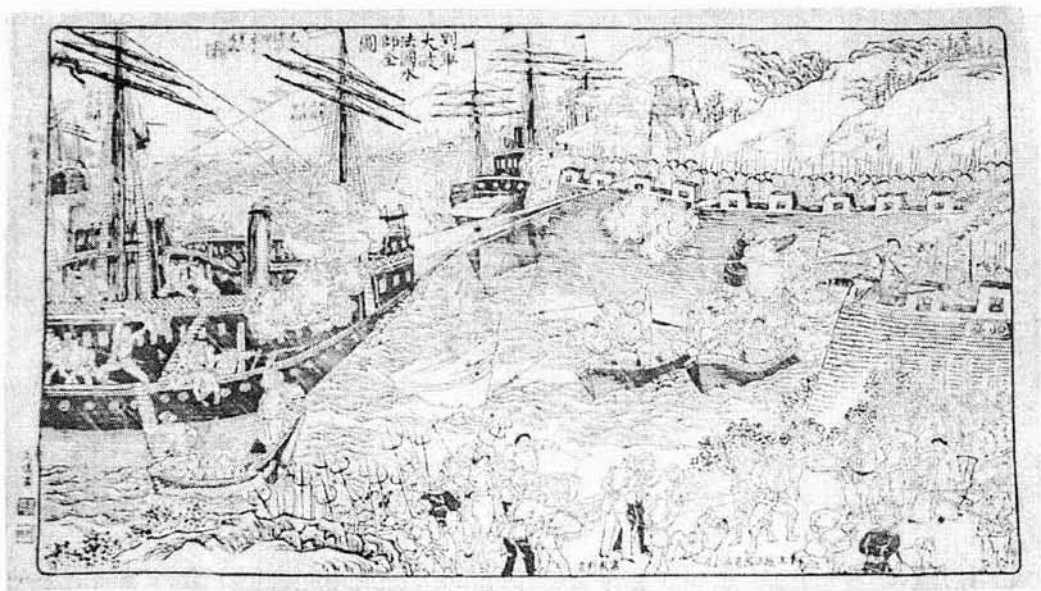


図27 「劉軍大破法國水師全圖」イルクーツク州立藝術博物館蔵



図29 「文儀齋」(図27部分)



図28 「越南電報館印」(図27部分)

四月二十三日)。慎重な市場調査が効を奏し、『點石齋畫報』は爆発的売れ行きをみせ、『申報』と同様に時代を代表する出版物となったのである。

〔注1〕

「在越訪事友」をここでは、所用でベトナムに滞在している友人と訳した。おそらく商人か役人を指しているのだろう。「訪事人」は「旧時の通信社や新聞社が各地に派遣した取材記者」であるが、この広告主は新聞社ではなく「顧春記」という画店である。単独に取材記者を派遣することはないだろう。広告を出す二十日ほど前の三月八日(新四月三日)の『申報』記事には、「本館は先月『訪事人』(取材記者)をハイフォン(海防・ベトナム北部トンキン湾に面す)に派遣したが、そこに三日滞在了のち、フランス軍に許されず香港に戻った。本館は、ハイフォンにいる華商人と西洋人に頼んでニュースを得る予定」と書いている。前後の記事から推測して、申報館はまだ駐在記者をベトナムに派遣していない。ちなみにこの広告の二日後の光緒十年三月二十八日の『申報』は、福州で取材する人員を公募する社告「招延訪事人」を第一面に出している。

〔注2〕

「上海英租界分圖」(一九一七)と「新繪上海城廂租界全圖」(一九一八)は、『老上海地圖』(張偉等編著、上海画報出版社、二〇〇一年)による。

〔注3〕

劉汝醴・羅赤子著『桃花塢木版年画』(上海人民美術出版社、一九六一年)

〔注4〕

戦闘があつた「紙橋」を、版画では「紫橋」と書く。広東語では

「紙」(紙)と「紫」(紫)が同じ発音のため、「紫」の字をあてた名前が伝わったものだろうか。

〔注5〕

『中国歴代職官辞典』(上海辞書出版社、一九九二年)

〔注6〕

木之内誠編著『上海歴史ガイドマップ』(大修館書店、一九九九年)による。なお、『中国新聞図史』(広州・南方日報出版社、二〇〇二年)の十二頁には、望平街にある申報館社屋の写真が掲載されている。

〔注7〕

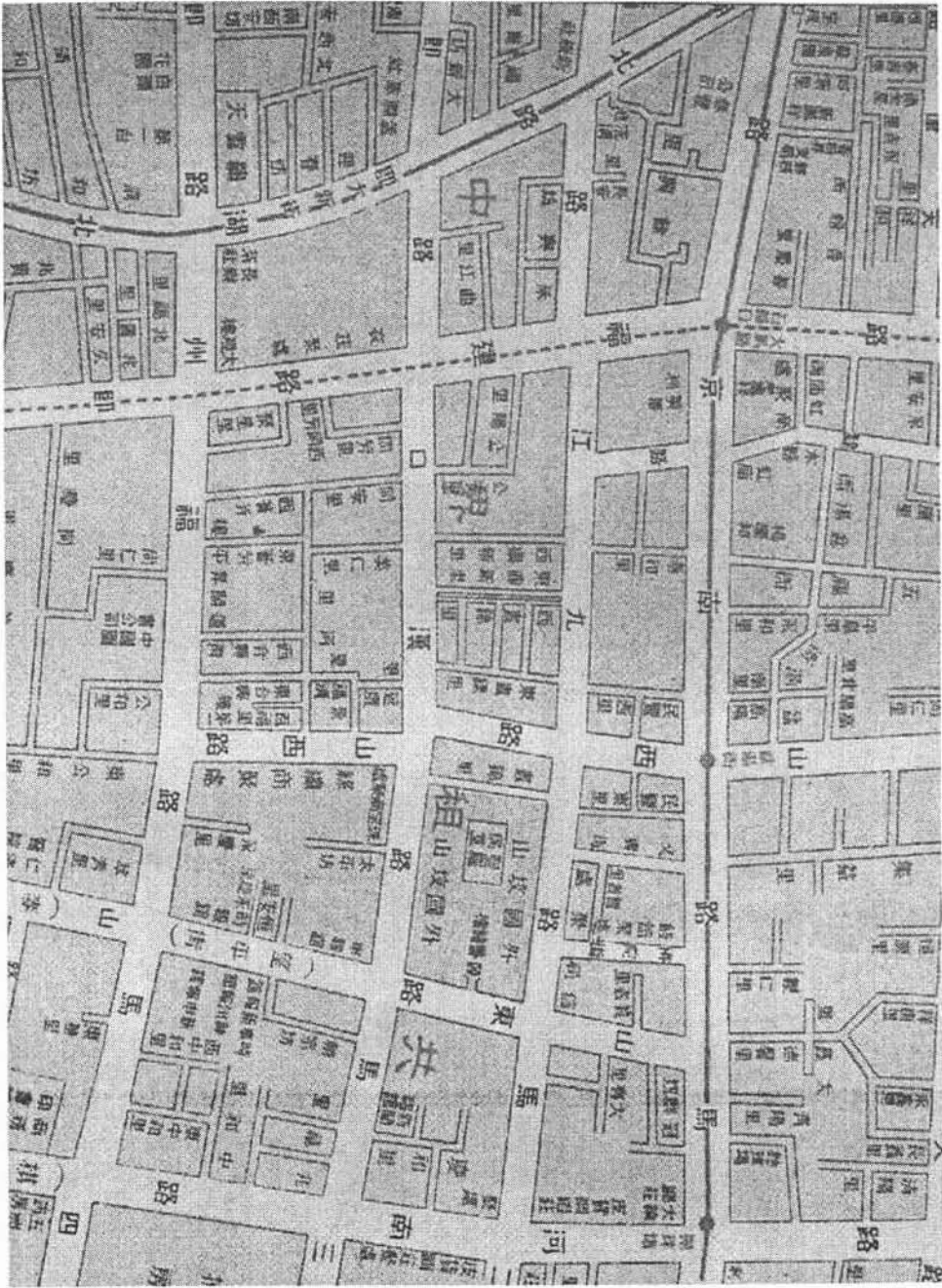
張弘星「失われたプリント・メーカー——E・メイジャーと点石齋画報」『日中藝術研究』三七号(日中藝術研究会、二〇〇二年)

〔注8〕

メイジャーは『點石齋畫報』の創刊号で、中国と西洋の絵の違いについて、彼の見解を述べている。中国絵画の画法を少なからず研究したあとがうかがえる(原文：資料四)。その一部はつぎのようにいう(大意)。「中国の画家は既成の方式に拘り、決まった構成法(格局)を持つている。まず配置を決め、それから始め込みをして勢いを整える。結構の粗密と気韻の厚薄は、その人の学力の高低および度量の広狭によって、レベルが判断される。西洋画は似ていることが最上であるが、中国画は巧であることを尊ぶ。」

〔注9〕

拙稿「『点石齋画報』創刊の契機を作った「時事版画」——ロシア収蔵中国民間版画調査より」『東方』二二六号(東方書店、二〇〇三年四月)



資料六 「上海英租界分圖」(一九一七年)『老上海地圖』(上海画報出版社、2001年)より

【博士学位论文提要】

《十九世纪中国的战斗时事版画——从太平天国到义和团事件——》

三山陵

十九世纪的中国清朝继与英国之间的鸦片战争（一八四〇年）之后，与欧美列强及日本发生了多次战争。其间经过国内太平天国运动的动乱，逐渐被逼入灭亡。在这段内忧外患的时期，以平民百姓为对象，制作并贩卖了大量描绘这些战斗及战争的“战斗时事版画”。

现已证明存在的战斗时事版画，始于太平天国时期，截止于一九二〇年代的军阀战争时期。本文将论述范围设定在十九世纪后期从太平天国到义和团事件之间。该时期是媒体（印刷、报道）的重要变革期，在战斗时事版画上也反映出某些影响。

战斗时事版画容易被看成类似“新闻画报”一类的东西，但这只是现代社会的观点，战斗时事版画本身并不承担“新闻报道”的职责。曾经刊登战斗时事版画的外国媒体异口同声地批判说“中国的战斗时事版画违反事实”，然而这不过是站在传媒业已经确立的立场上的批判。在本质上，中国的战斗时事版画是用来“观赏娱乐”的，是否偏离事实并不重要。在更深层面上，则包含着与得胜图一脉相承的“中华帝国君临世界”的传统意识（中华思想）。

在制作方面，如同民间版画制作中经常看到的那样，销路较好的图案被视为“粉本”，同一图像被反复利用。经过多次转用（借用、盗用）的图案，最终作为表现模式被定型化。模式具有符号的功能，老百姓看到某一表现模式，就能大体推测出其内容。有一些模式跨越不同的战争时期被长期使用。

十九世纪后期（从太平天国到义和团事件）的战斗时事版画与俗谣、戏曲等大众艺术不无关系，同时随着新闻业的普及显示出与新闻报道的关联，但在本质上和“年画”一样，是作为娱乐、观赏的对象。

战斗时事版画直接反映出清末平民的朴素感情（祈求吉祥）与长期形成的思维方式（中华思想），是了解当时社会、文化的重要材料。

【关键词】

战斗时事版画、报道、年画、得胜图、中华思想、粉本